

「CEFR」英語の民間試験の比較に活用

理念抜きに「尺度」独り歩き 懸念

研究者が集会

2020年度から始まる大学入学生共通テストは「読む・聞く・話す・書く」の英語の4技能を測るため、民間試験を活用する。異なる試験の成績を比較するため、文部科学省が用いるのが「欧州言語共通参照枠（CEFR）」だ。欧州で異なる言語の人たちがお互いを理解する（CEFR）1と2だ。今月初めに京都大で開かれた集会以、この理念を抜きにしたまま、尺度としての役割が独り歩きすることを懸念する発言が相次いだ。

（編集委員・氏箇喜）

「CEFRの理念と現実」と題された集会は、京都大の西山教授（言語教育学）が実行委員長となり、各国の研究者が参加して2日3日に開かれた。

西山氏は冒頭、CEFRが誕生した経緯を紹介。欧州の統合を目指す「母語に加え、二つ以上の言語を学ぶことで相互理解を深めよう」という考えが背景にあったとして、「母語と英語を学べばよい」という日本の違いを指摘した。また、CEFRが「言語力を改善するためのカイトック」であるため、基準ではなく「参照枠」とされていることも説明した。

甲南大の藤原三枝子教授（言語教育研究）は多言語教育の例として、ベルリン州立ヨーロッパ学校の実践について発表。外国籍の人々の割合が割近くなるベルリンで、ドイツ語とともに英語やフランス語、ロシア語などの言語を授業し、異文化の生活、文化を学ぶことで開かれた姿勢が育っていることと紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

藤原氏は、CEFRの開発者らに対して室蘭工業大のクラウゼ小野・マルギット教授（文化間コミュニケーション）と紹介した。

CEFR

「外国語の学習、教授、評価のため」のヨーロッパ共通参照枠。2017年に発表され、各国の言語の単語や文法を「知って何ができるか」ではなく、言語を使って「何が出来るか」に注目し、異なる言語間でも能力を比べられる尺度として利用されてきた。具体的には、「話す」「書く」に分類。能力をA（基礎）、B（自立）、C（熟達）の3レベルを裁定し、各レベル評価を1と2に分けることで6段階の評価を可能にした。



シホで質問に答える鳥飼美子さん（京都大）

改革は「産業構造の問題」

集会の後半ではシホジウム「CEFRと入学生試験をめぐって」があり、立教大の鳥飼美子（言語教育学）と東京大の名倉教授（英語教育学）が登壇した。鳥飼氏は民間試験の共通テストの活用について、8種類の目的や内容、受験料がはらんで「公明和教授（テスト理論）、大阪大の榎本剛士准教授（語用論）も壇上に上った。南風原氏は共通テストについて「カリキュラムと指し導、評価の一貫性と透明性を目指しているのに入試で対照表に使うのは理念から外れる」と結んだ。一タだけで、CEFRのノウハウの対応を決めている」と指摘。「個々の民間試験でも対応が難しいのに、異なる試験間の比較は砂上の楼閣。軟弱地盤の上の辺野吉基地のようなもの」と批判した。榎本氏は今回の入試改革の背景に、「グローバル化で英語教育を強化してほしい」という経済界の要請があることを踏まえて発言。今回の入試改革は「英語教育の問題」といっても、政府や文科省も巻き込んだ産業の構造の問題として問うべきでは」と投げかけた。

